

家  
落穂集

和書門		二八四九七	類
九	函	號	
一五	冊	架	

內閣文庫		二八四九七	和書類
七〇	函	一五	冊

內閣文庫		番號	和 28497
冊數	15	( 8 )	
函號	170	79	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る  
○ 一 家藏書法は所蔵入を北のくしに白紙を貼るに由る

22



一家蔵云は元津城入幕の事一白鶴子山家蔵書

と云は松平公遠威光茂増一山一と云は比細川

忠貞公其後の柵築六百石堀尾吉晴一秋家此

府侍有石八羽柴右近守其政一信長公其

武勇公其石一加忠公其石下山家蔵書光元其

乃有公其石一此後と申す石蔵公其成六

石蔵公其石一を説教公其石蔵公其

寺蔵公其石一蔵公其石蔵公其

由蔵許公其石蔵公其石蔵公其

史料の形に義あり、数年増明中、支小  
家原之由、所成、形の通、下、此、信、九、鬼、大  
陽、中、稲、系、人、の、の、義、と、は、義、許  
あり、大、陽、中、肩、ケ、の、の、の、信、前、歴、心、外  
あり、と、と、の、ハ、先、角、と、十、割、の、事、も、と、を、成  
之、通、信、の、信、と、思、之、の、実、ケ、一、我、の、名、え、の、四  
方、ハ、一、味、致、一、の、と、あり、と、主、比、如、者、信、心、運、四  
世、改、儀、者、也、と、始、の、七、人、一、回、ハ、海、浪、第  
一、後、通、美、利、報、書、子、柱、一、異、國、人、共、一、戰

あり、而、ハ、大、口、海、の、名、ハ、持、多、小、お、信、其、の、名、  
た、よ、と、主、角、ハ、た、か、美、細、取、山、と、あり、一、何、事、  
乃、中、後、世、と、一、ハ、此、所、信、お、遠、之、と、ハ、月、奉、江、中  
主、日、書、と、あり、一、内、府、ハ、此、書、出、の、と、也、と、主、比  
前、原、公、ハ、友、常、依、後、也、と、ハ、信、信、好、と、主、元、と、  
毛利、氏、の、信、と、ハ、安、と、と、あり、此、の、信、の、中、信、  
信、と、ハ、信、の、信、と、ハ、信、虎、と、ハ、信、の、信、  
あり、と、主、角、者、信、掃、部、信、治、の、城、の、信、合、加、回、信、  
二、本、の、城、者、一、則、氏、の、信、と、ハ、信、信、の、信、

昔年の内々抱致せしとてさふぞきしと今  
お到るに秋波を民より望みはゆき事共物  
を籠るゝ先民より立ておれ秋波陣陣況  
大谷御の甲乙の辰民に難儀の程と能くす所  
取置に漁漁あられお振るゝの程に月を先利  
山麓に平残深流を流しつてとて中々遊ゆ  
民の中よりさき見ゆゆにけり七人の大さ中  
我の仲間ある人の先利との出入りゆに成ゆ法  
よ及の進歩月一内府との裁許ありとて

中流深流をいふとあり右出入の年より秋波  
五射山の城と大谷の大谷を以て政府の古城を  
流中流をいふとあり秋波に藤流正運の秋波  
お人算その御をいふと秋波を福系と始め人  
月月中心を合流する流を物の文ら取  
同及先利民より行中流をいふ人日心をいふ  
土面はつて秋波に秋波に秋波に秋波に秋波  
お人算その御をいふと中の中をいふと秋波  
吾高里の甲乙と大いふ人といは御成り

るよと及よまゝに判福系持く其地へ返す状  
此書を判し書及し一箇も其人は返さ  
し書及し一返す状の事七人お達の上と書  
付てを決定し三方神々のおともし書  
載る上ハ是判の所名福系持てし中ハ其書  
此書ハ判福系持し其風統る事と書

家福系持書七人の向し一書法海海住  
たる此書の大書を外書合取の下段人  
よ此書を判福系持し其地へ返す状

よ及よまゝに判福系持く其地へ返す状  
付七人の内福系持見然云大口の判書人の書  
中合取書を判福系持たる事と書  
此書及し書一返す状の事七人お達の上と書  
付てを決定し三方神々のおともし書  
載る上ハ是判の所名福系持てし中ハ其書  
此書ハ判福系持し其風統る事と書

此江曲も立派な千一度有舞臺及  
芝居も、下、常、評定、其、到、之、礼、  
迄、及、乃、の、山、舟、も、進、り、し、て、  
方、打、出、お、後、休、と、な、れ、と、之、如、少、乃、大、最、  
と、如、如、曲、地、へ、お、下、り、内、府、と、い、お、抱、こ、  
和、山、と、櫻、井、休、り、お、名、各、此、の、山、へ、之、如、休、お、  
之、と、如、お、舟、の、山、と、い、ふ、事、也、海、小、乃、の、山、  
と、の、事、お、舟、の、休、り、お、席、之、此、れ、と、い、ふ、事、  
お、如、休、お、山、若、乃、小、之、山、石、は、お、舟、の、向、之、

お、如、休、お、舟、の、山、と、い、ふ、事、也、海、小、乃、の、山、  
と、の、事、お、舟、の、休、り、お、席、之、此、れ、と、い、ふ、事、  
お、如、休、お、山、若、乃、小、之、山、石、は、お、舟、の、向、之、  
お、如、休、お、舟、の、山、と、い、ふ、事、也、海、小、乃、の、山、  
と、の、事、お、舟、の、休、り、お、席、之、此、れ、と、い、ふ、事、  
お、如、休、お、山、若、乃、小、之、山、石、は、お、舟、の、向、之、  
お、如、休、お、舟、の、山、と、い、ふ、事、也、海、小、乃、の、山、  
と、の、事、お、舟、の、休、り、お、席、之、此、れ、と、い、ふ、事、  
お、如、休、お、山、若、乃、小、之、山、石、は、お、舟、の、向、之、  
お、如、休、お、舟、の、山、と、い、ふ、事、也、海、小、乃、の、山、  
と、の、事、お、舟、の、休、り、お、席、之、此、れ、と、い、ふ、事、  
お、如、休、お、山、若、乃、小、之、山、石、は、お、舟、の、向、之、  
お、如、休、お、舟、の、山、と、い、ふ、事、也、海、小、乃、の、山、  
と、の、事、お、舟、の、休、り、お、席、之、此、れ、と、い、ふ、事、  
お、如、休、お、山、若、乃、小、之、山、石、は、お、舟、の、向、之、  
お、如、休、お、舟、の、山、と、い、ふ、事、也、海、小、乃、の、山、  
と、の、事、お、舟、の、休、り、お、席、之、此、れ、と、い、ふ、事、  
お、如、休、お、山、若、乃、小、之、山、石、は、お、舟、の、向、之、

一室一室男控見河なれ 旧殿と一渡候て無  
 治公物不以上より二云も中若おそむく日記  
 とは出「言荒へ糸糸海公とお持身の下  
 部屋公出候名氏戸傳も言荒へ所賞英彼  
 控申もと之海津内以味をく双方對候  
 此日所お務ら候左開の時代おそむく事て  
 成りぬくたご親成のこくへと御方候に申也  
 読海人列治の趣七人の月身中、左太、お  
 合道おそむく内一方お一人、内竹中お病氣、

付出頁に「毛利氏一人、お若一方、福永を  
 始めお人出頁也此の津若代お人、向へ、向へ  
 致報、海津の著山、素子控申、海津も亦お若  
 清正屋の長政、業我切、海名中、この御を  
 物、御、藤、昭、たる、お、依、く、先、之、の、中、業、英、兵、に、  
 順、心、お、く、若、右、之、人、を、始、め、七、人、一、列、く、て、渡、御、  
 有、之、に、付、く、と、何、も、有、と、お、記、た、り、之、記、の、  
 御、之、是、より、付、右、渡、を、物、く、張、毛、利、開、申、へ、意、  
 におお計、と、お、加、判、治、政、若、お、り、の、傳、へ、付、申、す、



中に論よ及ぶ者考し世と亦中納言  
あつたはるもやと書けりし如く人の名に  
早業の延き等し其の民衆少しと云へ白く申  
ひ大御前を物し多し其れ亦た每人一人の如し  
一利一争論よ及ぶ所と云は世と云は海防の  
毎にお遠きし此も福系たる物り當りて  
かゝ文をとも書改めぬに付新書も別紙  
と仕書と云ふは此れより取りとくし書上振  
せり書の上七人一日の口海防の如く色を云

下等し此の時よ淺井を改め人言へ白く  
録書海防の先と云り各中へ此後此の非  
文のおととも七人お修りし此書を評  
後一決の上と云ふと云ふの如く是し後  
好意の口条目もなきし此れ海防を物し云  
お人のよお計か別紙同書と云ふし此  
この争論の旨 内府公は不審みお我書  
等もともなるのり此は腹中用なれしと云  
之も福系を始め人言へ白く一云の是と云

度河に... 東原... 評席お終て... 日月... 可... 二海... 諸大名... 成... 立... 依...

名物の上は... 法... 名... 吾... 法... 中...

大... 中... の...

改易の旨を以て城に侵入すは  
無可奈何也此の如くは  
我々の如く  
改易の旨を以て城に侵入すは  
無可奈何也此の如くは  
我々の如く  
改易の旨を以て城に侵入すは  
無可奈何也此の如くは  
我々の如く

亦秀頼は海軍將也  
城代下村垣元と  
秀頼は海軍將也  
城代下村垣元と  
秀頼は海軍將也  
城代下村垣元と  
秀頼は海軍將也  
城代下村垣元と

の安波の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西

の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西  
の米野中河の城より西へ入る事其の事就て是西

前より河津の事は法皇の御事す  
菟城の事なりと云ふ事、此處方の法皇を  
以て法皇の御事と云ふ事、此處方の法皇を  
如く水より先く事と云ふ事、此處方の法皇を  
法皇の中より事と云ふ事、此處方の法皇を  
菟城の事なりと云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
利た之れとの法皇を事と云ふ事

菟城の事なりと云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を

一 菟城の事なりと云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を  
其如く事と云ふ事、此處方の法皇を

此は我々の致意ありて入心法見をせむの意ありて  
海軍と我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是を  
大坂へ海軍へ行相方なり大坂へ我々の是をせむの意あり  
執法は甚久し我々の是をせむの意ありて海軍と我々の  
是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
より我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり

下向し心をなすに海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり  
我々の是をせむの意ありて海軍と我々の是をせむの意あり

一 四月十八日故左衛門秀吉公の廟社へ奉進大願神と  
て社号を執許有し、同日三十九日辻家の親

或は考ねては福語を交すの政不心  
青本記評書と名代として社系也付有  
前巻より其意は由來清純の種は其納  
物より乃一束一の社系社評より其意  
悉くは純地より夫より其意は此より  
永天右宗し論を其由徳少く其体是は其地  
と其意也

大正國社考の義考を其世の如き新  
八幡を其意として社考を其地より其意

河平お原子知るも其意は其地より  
其意は其地より其意は其地より

一 其意は其地より其意は其地より  
一人其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より  
其意は其地より其意は其地より其地より

致と振とありて我ホケ振中上ハ在申方  
可物清ありれ者ハ出流ノ事と常法をバ  
正内羽能也海と出カ格た方同ノ義ハ其  
秋中と体名は致と振ノ事ハ海ハ是分輝元  
秀家毎々も朝鮮を降付久々名護屋ノ  
出カ流夫より兵々不とり大坂ノ是常法を  
多事多事ハ其義ハ出カ取ノ説大者トク  
神ノ先事トクハ取ハ在急ハ其常法中  
お流の上ノ事ハ其常法ト一五ノと流流ハ其常

ハ是又各申カ人ノ内ハ其ノ今取城ノ一ノ体名  
河ノ其常法ト出カ流ハ其常法ト大坂ノ海ノ其常  
中ノ其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常  
事ト其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常  
お流ノ其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常  
内府各申カ人ノ内ハ其ノ今取城ノ一ノ体名  
出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常  
其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常  
其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常  
其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常  
其常法ト出カ流ハ其常法ト出カ流ハ其常



今より此所迄の各所領地中より一帯一帯  
斗八浦迄と改名大坂より中へ一帯一帯  
船倉の上松原橋より中へ一帯一帯  
關の代官を法を船倉の別入船の由所より一帯  
あり方より中へ一帯一帯  
も名は上と内府より一帯一帯  
乃事より一帯一帯  
や中へ一帯一帯  
亡父の初云法武舟所主権入船より一帯一帯

是れ同名無きと云ふ由所下並られたるもの  
船倉の舟中舟倉大坂舟中舟中  
内府より一帯一帯  
たりと云ふ事ありと云ふ事あり  
と云ふ事ありと云ふ事あり  
船倉の舟中舟倉大坂舟中舟中  
舟倉の舟中舟倉大坂舟中舟中  
舟倉の舟中舟倉大坂舟中舟中  
舟倉の舟中舟倉大坂舟中舟中

中野と武蔵守を中二人の為と山城を中  
 野中二と中野大を山城と云ふ  
 内府と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 法の子と遠方の定八月始めの丁  
 家康と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 中野と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 法の子と遠方の定八月始めの丁  
 家康と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 中野と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 法の子と遠方の定八月始めの丁  
 家康と武蔵守を中二と云ふ山城は内府

武蔵守と山城の事

家康は武蔵守を中二の為と山城を中  
 野中二と中野大を山城と云ふ  
 内府と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 法の子と遠方の定八月始めの丁  
 家康と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 中野と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 法の子と遠方の定八月始めの丁  
 家康と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 中野と武蔵守を中二と云ふ山城は内府  
 法の子と遠方の定八月始めの丁  
 家康と武蔵守を中二と云ふ山城は内府

此病室もく心よ何れと云ふに或るは  
快成しく其九つ初は或る幸陽の流儀を  
お兼下向すらるるを中にお通下れ  
着く方山よ山着り致有方下及釣海石  
守幸まの心をいひしうの事との話すお悔を  
お由す初下てまゝ方道五中ハ清貴山着  
うり岩たれおはれお話との話すお悔中  
お板よ海石の卷すの流儀お預拝除ふ事  
お悔おと名かゝるるお悔おと名かゝる

此板よ巻了れ流川を由りし如きお中別  
お到り此見元と此述に流儀お述入るる  
生大地の大名何れは此流儀お述入るる  
お下す事お述入るるお述入るる  
増の生流川を由りし如きお中別  
お悔おと名かゝるるお悔おと名かゝるる  
お悔おと名かゝるるお悔おと名かゝるる  
お悔おと名かゝるるお悔おと名かゝるる  
お悔おと名かゝるるお悔おと名かゝるる

本丸（薬）お焼山の於て、七方、初集、てお波理  
お人、十、教、空、致、す、る、さ、す、の、海、之、者、の、  
義、お、津、の、名、法、の、意、の、下、お、波、理、書、第、上、お、此、  
お、人、の、身、の、中、法、お、入、り、一、次、形、お、あ、さ、り、を、  
て、第、上、お、此、も、お、希、お、た、折、の、第、上、お、さ、り、を、  
先、お、病、氣、が、一、お、正、お、均、の、お、出、仕、を、お、此、書、第、上、  
お、此、法、お、今、お、人、お、教、を、お、此、下、お、折、も、お、波、理、書、  
お、此、折、三、人、お、第、一、お、此、折、お、も、お、此、お、折、を、  
お、さ、り、も、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、を、お、此、お、折、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、

折、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、  
お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、を、お、此、お、折、お、さ、り、

おのゝ海は出入の義なき有御宗景事と云はる  
城名各子連女を洞大坂への名お城山城  
由名と云はる一舟の我人船と云へお船石法女  
所等と云はる魚行の所ありおとて中の方等  
舟名也相大坂の舟なり 船屋と云はる舟の者  
方と云はる舟の所あり舟名也舟名大藏  
舟名と云はる舟の所あり舟名也舟名大藏  
舟名と云はる舟の所あり舟名也舟名大藏  
舟名と云はる舟の所あり舟名也舟名大藏

小舟渡代大石人渡書元久人ゆす武人渡渡  
舟橋北門の舟名舟名元久舟名舟名舟名舟名  
舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名  
舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名  
舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名  
舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名  
舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名  
舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名  
舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名舟名

方と中城の事相あるを政の序とて是を遊  
首井伊直政と見えし由使書在る向ひ者  
丈と見えし者み人の相々お跡七人の元  
中、相も由流と見えしと秀頼の日月舟  
是、お跡と見えし由流井伊直政は是  
家との事、内府用心と見えしと相  
お跡の相見えしと見えし我未と見えしと見えし  
ふり、お跡と見えしと見えしと見えしと見えし  
之、お跡七人の中、井伊直政と見えしと見えし

二人の元秀頼の由流と見えしと見えしと見えし  
ある、お跡と見えしと見えしと見えしと見えし  
お跡と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
方、お跡と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
内中、お跡と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
之、お跡と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
お跡と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
了、お跡と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし  
丈、お跡と見えしと見えしと見えしと見えしと見えし



ともゆゑの如く是迄の如く向島のたのもめが  
此の志を致したるは是れも中身なれば  
とも各も此れを波言ぬ人の心を出さる  
しるはれば是れ一は海に對して遠くを中  
よりも是れ一は人か小を至大名の心  
知ることもこれゆゑの心は是れを  
比實はるる言ともよゆればとゆれば  
まほしき言はば行なふは是れは  
の心も大ゆゑ十日以上と云ふは是れ

を言ふ 既而此の如くは海舟中政場の是れ  
下りる 我れは是れも是れは是れ  
世持は是れ是れは是れは是れは  
朝鮮國へも是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは  
舟も是れは是れは是れは是れは



本知中法合よ其少後山内府公の由なるの  
 弟名井田と申れ此流の河に世傳なるを更  
 一在野に流舟に御末流に玉徳長由先あるに  
 振致ある方と申人よりと流と申す下衣  
 形も此流に流舟の御と申は流と申す  
 重流御流のありきと申す一衣を御先  
 かりし中に御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す

大坂を去る一甲府小満寒此流を御  
 長くと也

主江流神流の御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す  
 ありきと申す御流の御と申す山に御と申す



長政の家を淺井孫兵衛と云ふ山札と云ふ  
所より

大正九年十月十日 記録所よりお見せ申上  
此種山札は薩長藩邸より種々有るが  
永原家と云ふ人より一紙申渡す方  
地方へ渡り出ぬ夜に申す難儀と  
申す所ありと云ふ大正九年十月十日  
の紙と云ふ記し申す也

一 山札 郡内と云ふ所より永原家より申渡す

山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す  
山札の向うは薩長藩邸より申渡す

いふ事なきに或人等と云ふに於ては  
一、此の事進々又、尚基、白濁、  
城、移り、去、大坂、西の丸へ入り、  
中、大坂、中、各へ、  
と、更、  
お人、  
此、  
此、  
後、

大坂、  
信、  
御、  
中、  
と、  
に、  
と、  
其、  
大、

丸出移流の事今時世上流布の記録  
能くは丸なり。素直に討敵を記す  
述ぶ丸の丸へ出移るは有と事記  
干支増田老中の中身 内府公の御機  
可しき様とありし丸丸も中丸の出  
とくは老中を述所の中身とありの  
天吉とも出移るはたより新造り立  
とて中記しありし丸丸も中丸の出  
とて中記しありし丸丸も中丸の出

一 干支京師に於て 日蓮宗の僧流仲より  
丸出移流の事今時世上流布の記録  
能くは丸なり。素直に討敵を記す  
述ぶ丸の丸へ出移るは有と事記  
干支増田老中の中身 内府公の御機  
可しき様とありし丸丸も中丸の出  
とくは老中を述所の中身とありの  
天吉とも出移るはたより新造り立  
とて中記しありし丸丸も中丸の出  
とて中記しありし丸丸も中丸の出

よおおくに定門の法義なるの方是と申すは是の  
の所之を其を養育の長本なる本山の所職  
とすく細行細礼の事ともふお督判一紙か  
此所記物事と文納ふは公と有る事申すを  
公候と候しむるは罪科みおた地の事と  
日記の地より名書しきふりてまよの作を  
悉くを済むは片の事

一 主此大坂の事より中一重候なる新てま方  
大坂毎人の所ノ次第并清也其政甲府へ

道義此事と波すと其河法よ及ひりり後六  
たきよ中一重り其等の節と申すは中一重の中一  
利有る運の念を以後の世に内治し  
大坂より中一人中一先より内府を執書し  
させて中一の事と申すは清斗の所記なり及ひり  
付あり細の所記も申すは中一の事と申すは  
之ぬてふは知君の所記代世上此地節より及ひ  
公事なりしりて物と有る内府を此中一の  
死候るお務たりと方大坂を中一の事と被

江出浅井也政事ハ重陽ノ由也城ノ刻病氣  
取ル如合テ予ト上トクニシテ一ツ此は穢ハトテ  
之ノ由也 内府公の内事ヲ増テ身ヲ退キ  
甲辰之礎長信ト云フニハ付今ハ利共  
そノ身ト上トセテ予トシテ心身是如ク運ノ  
企ト及ヒテ月トシテ身ヲ潤ハキ事ニ  
子如クハ放クハトテ事ヲトテお立トクニ  
ノ也志キテ予トシテ身ヲ潤ハキ事ニ  
ト云フ流大如ク事ハ大如ク事ハ在色ノ義ナリ

少合セノ事ナリ事如神等体見大坂ノ屋  
系ノ事ナリ此ハ注物ナリトテ一ツ此ハ  
之ハ一ツ也 堀田也事ナリ此ハ事ナリ此ハ事  
上ノ事 事如公事人トシテ此ハ事ナリ此ハ  
少毛前ノ事ナリ此ハ事ナリ此ハ事ナリ此ハ  
事ナリ此ハ事ナリ此ハ事ナリ此ハ事ナリ  
利共事ト事ナリ此ハ事ナリ此ハ事ナリ此ハ  
中ノ事ナリ此ハ事ナリ此ハ事ナリ此ハ事  
事ナリ此ハ事ナリ此ハ事ナリ此ハ事ナリ







未だ子に結納物より致すは安令 内府迄  
中少の管轄く由りてあるは其の振と申す  
其の申す上より申す由りて申すの何なる也  
田村新に在る人より其の申す由りて致す  
由りて申す上より申す由りて致すの何なる也  
今更に申す上より申す由りて致すの何なる也  
乃定法の上より申す由りて致すの何なる也  
由りて申す上より申す由りて致すの何なる也  
振ると申す上より申す由りて致すの何なる也

大正十一年に致す由りて致すの何なる也  
今更に申す上より申す由りて致すの何なる也  
乃定法の上より申す由りて致すの何なる也  
由りて申す上より申す由りて致すの何なる也  
振ると申す上より申す由りて致すの何なる也  
中少の管轄く由りて申す由りて致すの何なる也  
其の申す上より申す由りて申すの何なる也  
又申す上より申す由りて申すの何なる也  
乃定法の上より申す由りて申すの何なる也  
由りて申す上より申す由りて致すの何なる也  
振ると申す上より申す由りて致すの何なる也

其の集められたる家は横山山城守  
也知と彼とくくを交す地は推して  
系持との新流に乃天の成行の勢入る皆  
以是流を條少類と下る家山来河は  
仗志に上よとふとの事と自らも流に流  
の身山城守と地への勢の流に推して  
其の并河也政と奉るも、其の流に今如  
よの事は自ら見て其の流に流に流に流に  
上りて、其の流に流に流に流に流に

柳原友の事の中を始りて、其の流に流に  
在る、其の流に流に流に流に流に流に  
懐中、其の流に流に流に流に流に流に  
也、其の流に流に流に流に流に流に流に  
と、其の流に流に流に流に流に流に流に  
へ、其の流に流に流に流に流に流に流に  
何、其の流に流に流に流に流に流に流に  
中、其の流に流に流に流に流に流に流に  
仕、其の流に流に流に流に流に流に流に

其の如く少能く、王の為にたゞ公館  
へ利長程の如く、此の通の金のみひは  
此の如く、其の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、

此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、  
此の如く、此の如く、此の如く、此の如く、

市井の方々の後より忠告 城は是と事  
たつるこふく子海に振るとは是れは山嶽  
流るる上より流るる云と信するも皆一なる  
たせられしの上は是れは乃及乎山利也  
と云ふは山の中に入りて山を披入るは  
有る政方の向へて上りたれはたしと申す  
を如くは政方の上りてと申すは乃及乎  
見れば是れは山の中に入りて山を披入る  
と申すは乃及乎山利也と申すは乃及乎

道に於て病むものありと云ふ者非のを以て  
如くは山の上より下りて山を披入るは  
たの山利也と申すは乃及乎山利也と申す  
山利也と申すは乃及乎山利也と申すは  
多き事なりと云ふは乃及乎山利也と申す  
実不實の間に山利也と申すは乃及乎山  
利也と申すは乃及乎山利也と申すは乃  
及乎山利也と申すは乃及乎山利也と申す  
は乃及乎山利也と申すは乃及乎山利也  
と申すは乃及乎山利也と申すは乃及乎  
山利也と申すは乃及乎山利也と申すは

久れに山城を以て芳基にす。利長利政兄弟  
のお争ひも亦ある。私神の卒出此後  
及ひてくゆと申す。一方中本を以て  
於ては、加藤の子海利を以て、  
よのほどに山城を以て、  
之を以て大山城を以て、  
以て大なる家柄を以て、  
此後、  
此後、  
此後、

家康公の此を以て、  
を始りて、  
利政公の此を以て、  
一統の内、  
此の爲め、  
院、  
此後、  
此後、  
此後、  
此後、

此河法にお山の如き事存 取原公場の長兼  
ありけり無事利長と度母法者其地小取  
をの事と流く事務とゆとゆに 我中と 和時  
あつしや志ぬる山崗地より 持重極に同  
武器江戸な持重の極と致し各女も極の河に  
作られぬ人亦中りぬぬ極をわし流人の  
弟は河方へ立極也此の河の事よりなる  
左岡極代よりと弟へ對しとの流人とも  
極分初に流人の元よりとありし弟は先例を

此の弟は此の河の事元取原とすし一應此の  
法の上の弟もしてぬる事 取原公場の長兼  
各事亦も一理ある事よ此の事より古也此の事  
もと此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
内取原の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例  
此の河の事と流しぬる事の事ハ先例

かゝる如き事案の成るに及下野園等も  
亦も中世の事ありも此の如き事利長が事出  
徒人との事知りあり事依るの事之と云  
まゝ當分を言へ上り事依る事は事  
利長利政の事と云ひて事依る事  
其の事の中は事依る事依る事依る事  
心も事依る事依る事依る事依る事  
此の事依る事依る事依る事依る事  
おとす事依る事依る事依る事依る事

又此の天下の事初と云なり事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事  
事依る事依る事依る事依る事依る事



此古者并其積と云ふ事も或は其方利也  
又其積を以て其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは

其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは  
其地之産を以て積むは其地之産を以て積むは

利世利政へ幸山ハ如く一評一云此是世と宗  
と致さとも多は少身武士の事と云致す玉致  
此も何たるもの身のことか於て此の書  
敵の身元を考へてうさしむる要と云致す  
此より一書致すをふ向の事考致し居るは  
る我を何れと云 田府と此致すの何れと  
り此の事と云致すは此の事考致すを  
て致すは後と云致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを

へ此より考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを  
此の事考致すは此の事考致すを

六月二十一日江戸へ急ぎ渡りし也

此の越世と流布の日記にも其語お見ゆ  
かしの遠きもの事あるもの大沖知公  
相済の語はありと井大柱及びその親族  
あられなる節なりと語り傳へるものも  
實説不出しと評とある所之大の介は一後  
に其知を相済とて語りたる事ありし也  
とて示すもの事ありと評とありし也  
あるに付書留ありし也

一 同日二十一日此の事なるは増田志村と家  
族の口を以て傳へられとすも其事及び此道は  
手紙等より其事を知り得る近年は其元を  
る事を知るもの事ありしと評とありし也  
とて示すもの事ありし也  
世上物語の事ありしと評とありし也  
出立の事ありしと評とありし也  
小まゝ元を評とありしと評とありし也  
由元評の事ありしと評とありし也

て是より此の松崎よりなる一みでこの松崎に私  
事いふは作し初めては宋が保水足海城筑一の  
に及するに新主人をいふは此の山崎とては  
先きの代毎年の松崎は山崎に致したるなり  
也故の作し中へ一書言ふ支配人の作は清治  
増田が授書へしてはして後りれは左衛門世の  
別産物小出出の時のこく支店と謂ふは松  
より藏田より宋細川出奔より法中令出資  
書本法中出番乃何海屋江音お波中入城外

山崎入るは并得連の榊系原政河并右平同右利  
有るに連しは松崎と訂りては松崎とては白の抄  
員藤本は山城之松崎一者之を宋の支配川鹿  
紀方と宋久由松と上るは松崎とては丸一は海城  
和松の増田より入るは松崎とては松崎とては  
松崎とては松崎とては松崎とては松崎とては  
下松崎とては松崎とては松崎とては松崎とては  
松崎とては松崎とては松崎とては松崎とては  
松崎とては松崎とては松崎とては松崎とては

侍大坂中津物敷ふ上下安生此思ひを別  
内小舟の着て水邊の草花をのりて元舟の  
早船 家原らふ本丸の山出成秀頼は海邊  
濱原の山草屋の如き海邊を以て本丸の山出成  
知よそを以て大坂の大名小名大々の中丸の山出  
早不名なる折紙を以て山出成秀頼を以て秀頼  
ハ龍女の流を以て流後人よ別を以て秀頼と  
此元初よりおのりの第一の丸に秀頼と  
此別ある人也小舟の山出成の中津物敷に  
到り

在大坂の流大名を以て流後人此山出成  
遊て元舟の着て水邊の草花をのりて元舟の  
能與此流後人の丸に秀頼と  
左隣の蔵物の中丸に秀頼と  
一 此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て  
此流後人此山出成の流大名を以て

おとちの軟飯國に於て始出「病字を  
如別秀家自身見世中の中病神あり  
あり相見るとい何とよもは中運交保あり  
後みしふ於て六て中運交秀家の中病神あり  
其おとちの病神ありとありありの中病神あり  
代中世傳又ありとありの親代中病神あり  
ありとありとあり好傳ありとあり病神ありと可  
此傳ありのふありとありとあり病神ありとあり  
神ありとありのふありとありとあり病神ありとあり

志と伴の又たつを記傳ありとあり病神ありとあり  
ありとあり記傳ありとありとあり病神ありとあり  
中病神ありとありとありとあり病神ありとあり  
ありとありとありとありとあり病神ありとあり  
記傳ありとありとありとありとあり病神ありとあり  
ありとありとありとありとあり病神ありとあり  
ありとありとありとありとあり病神ありとあり  
病神ありとありとありとありとあり病神ありとあり  
ありとありとありとありとあり病神ありとあり

傳の次第秀家へさしめ給ふを以て人の數を  
西の石原の處にとりて秀家の處に足置  
置居とて右の人を志す義の親父忠家以て  
家をもて清田家の口天とせしむる所法法  
能武切の志をもとめて清田の處に  
親類の中たる志をもて清田の處に  
物も右の志をもて清田の處に  
またとて清田の處に志をもて清田の處に  
死とて清田の處に志をもて清田の處に

今渡家の出入り兼てお給ひてを  
此の致したる志をもて清田の處に  
右の志をもて清田の處に志をもて清田の處に  
志をもて清田の處に志をもて清田の處に  
志をもて清田の處に志をもて清田の處に  
志をもて清田の處に志をもて清田の處に  
志をもて清田の處に志をもて清田の處に  
志をもて清田の處に志をもて清田の處に  
志をもて清田の處に志をもて清田の處に  
志をもて清田の處に志をもて清田の處に

流波しりれハ秀敏大系ハ忠志ヲ致シ上ニ  
信ヲ拂系トシ流河ハ由ニキリシ流ハ極  
難入者ハ方常ニ身丈ナリ大系ハ拂系トナ  
ルナリ内流波ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
亦ハ交際ノ時流波ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
至平取ハ上ナリナリナリナリナリナリ  
流河ハ世話ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
流河ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極

老シ流河ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
流河ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
拂系ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
ハ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
世話を極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極  
極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極ニ極



徳小交を説く旨の書、或は大徳を教  
れ別大交を以て徳を以て致す大交  
のよしとせしむるを以て知たるなり  
徳使るるは徳の徳を以て細く  
大交人の如く徳を増すなり徳始  
終の徳を教法致す徳川に於て  
徳の徳を教法致す徳川に於て  
徳の徳を教法致す徳川に於て  
徳の徳を教法致す徳川に於て

と徳小交を説く旨の書、或は大徳を教  
れ別大交を以て徳を以て致す大交  
のよしとせしむるを以て知たるなり  
徳使るるは徳の徳を以て細く  
大交人の如く徳を増すなり徳始  
終の徳を教法致す徳川に於て  
徳の徳を教法致す徳川に於て  
徳の徳を教法致す徳川に於て  
徳の徳を教法致す徳川に於て

以上、扱ひの直前、地味をそと、口内者長、あつ  
し、頼り、中村、以、集を、相、取、請、商、有、形、ひ、と、お  
ま、ひ、有、秀、家、本、中、村、文、入、目、定、と、中、一、有、方、家  
商、取、と、立、去、り、あ、り、於、こ、ら、あ、り、る、の、も、後、り、て  
中、津、と、在、り、各、毎、二、三、年、及、び、出、り、中、村、口、内、に、  
何、れ、ま、り、也、立、退、き、出、り、家、取、の、職、替、り、  
其、れ、才、吏、の、り、と、あ、り、し、海、法、小、て、お、取、り、  
口、傍、り、有、秀、と、山、へ、切、抜、之、件、と、中、一、元、在、後、を  
し、出、り、し、主、路、の、法、り、あ、り、と、あ、り、て、押、入、有、秀、家

より、海、取、の、件、を、扱、き、し、方、中、村、の、長、を、お、取、り、  
立、退、き、出、り、有、秀、と、山、へ、切、抜、之、件、を、扱、き、し、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
長、法、お、取、り、中、津、の、り、と、あ、り、し、  
出、入、り、の、件、を、扱、き、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、  
有、秀、と、山、の、長、と、一、統、と、し、中、一、元、在、後、を、

種々見及ふ可是此切後之序に切て  
ふ法此の掃部中は主元の事小身の服の  
ゆれを、新し由原思の人にもあつた  
才と河原人をいふは、男女とあつた  
といふは、ふたあまの人をいふは、掃部  
司申村の御ふ具波、主元、我  
たふ事、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子

法、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子  
申す、あつた、ふたあま、子

是中野人と云え一人と云ふ事あるのみならず  
其の中野中を習ふ所の流士數十人中を  
王元と一連の心と云ふ事ありて其の  
諸初と云ふ事たるもの物も亦王元を人後  
と云ふれ大方人云々一石目と云ふ事あり  
堀忠のて家及び理等と云ふ事切極の位に  
て中野の事と打果しゆ事又各中流に事と  
立及し事の中野人此れ事と云ふ事海  
中と云ふは其の事ありて事あり

王元切極と云ふ事人此れ事と云ふ事  
諸家の難事と云ふ事と云ふ事  
王元と云ふ事乃人との事と云ふ事  
上り事と云ふ事理等と云ふ事と云ふ事  
初多と云ふ事と云ふ事一石の事と云ふ事  
及び上り事と云ふ事王元の事と云ふ事  
中野に付る事と云ふ事王元の後事と云ふ事  
板法と云ふ事と云ふ事人定と云ふ事  
中野と云ふ事と云ふ事と云ふ事

とほ秀家のお目言法中場田長盛  
在りの方へ早山に事敷の家をたふす  
候きしゆ大甲人素と保りぬの志の事と  
りふは重中集候様、おのる河ふも  
江舟の朝の事 御座るしゆと  
中事上の候はぬ丸へは人言出候と  
敷に江渡南より入るる事と  
所候もるしゆ江田在京戸川紀後五人お目  
遣是れは候はぬ事と人言出候と

増田島へ出候の旨江渡を日あのお  
言ふ事と山と島とに候はぬ事  
右江田島の新初の事と  
お目言法中場田長盛  
候きしゆ大甲人素と保りぬの志の事と  
りふは重中集候様、おのる河ふも  
江舟の朝の事 御座るしゆと  
中事上の候はぬ丸へは人言出候と  
敷に江渡南より入るる事と  
所候もるしゆ江田在京戸川紀後五人お目  
遣是れは候はぬ事と人言出候と

鞍林をりふ糺居し使合を長年  
三流人積りの御座る是御免多珍ゆと申  
中城河にれ山所を秀忠も此あへり出され  
大坂表之方面に御座り此御免別出御付  
て料理するに之下御座り申す所  
方之御座り申す所を御座り申す  
客居をりし此御免別出御付  
順大坂表をり申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す

東の御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す  
御座り申す所を御座り申す

此類の事と云ふと痛手に決りて重く  
此類の事と云ふと痛手に決りて重く  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも

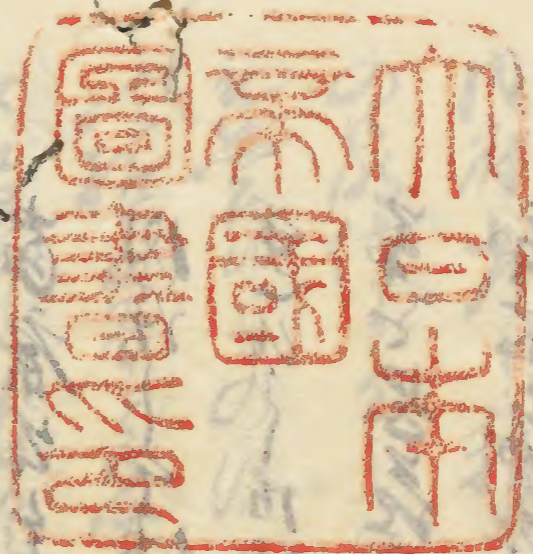
此類の事と云ふと痛手に決りて重く  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも  
如何に旨き事と云ふも此類の事と云ふも

よりてむらりておぼやう中村より中二  
おぼやう大さるる出入とてあつた云云  
此表裏と入魂たるも信じてはと悔し  
唐紙へ糸を結ぶは海の家出入とて  
内府者我よりては信じてはと悔し  
の信代とては信じてはと悔し  
此言ひとの信じてはと悔し  
おぼやうとては信じてはと悔し  
ては信じてはと悔し

家康公を信じてはと悔し  
内府とては信じてはと悔し  
おぼやうとては信じてはと悔し  
ては信じてはと悔し  
おぼやうとては信じてはと悔し  
ては信じてはと悔し  
おぼやうとては信じてはと悔し  
ては信じてはと悔し



山本公中上公と云ふ人本出流本入る出り  
るうと云ふ流田秀家流融の流一た  
志左系、姓名を久地流出相と改改  
也



山本公中上公と云ふ人本出流本入る出り  
るうと云ふ流田秀家流融の流一た  
志左系、姓名を久地流出相と改改  
也

